

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

緒言

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 玲子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005987

緒 言

齋藤 玲子
国立民族学博物館

1 趣旨

本書は、国立民族学博物館（以下、みんぱく）における共同研究「カナダにおける先住民芸術の歴史的展開と知的所有権問題—国立民族学博物館所蔵の北西海岸インディアンとイヌイットの版画の整理と分析を通して—」（2007～2010年度、代表：齋藤玲子）の報告書である。

みんぱくには、北西海岸先住民の版画およびその原画が約700点と、イヌイットの版画および絵画約400点が収蔵されている。これは国内随一のコレクションであり、北米以外では稀にみる有数の作品群と言ってよい。収集の経緯と状況については、別稿を収録している。

本研究の目的は、みんぱくに所蔵されているこれらの版画を整理・分析し、版画という新たな技法の導入とその展開が、北西海岸先住民とイヌイットの社会に与えた影響を考察することであった。具体的には、1）それぞれの美術様式の分布や通時的変遷を明らかにし、2）20世紀後半の社会・文化変容や政治・経済状況との関連を探り、3）芸術に関する知的財産権やアイデンティティの問題を検討した。本研究をとおして、北西海岸先住民とイヌイットの芸術がそれぞれの社会に与える影響とともに、ドミナント社会にも影響をおよぼしていることが確認されるとともに、その芸術に関する研究の重要性と課題も見えてきた。

また、本研究では、みんぱくが所蔵する日本有数のコレクションを再評価し、活用することも目指した。研究期間中には、共同研究員の大部分が特別展『自然のこえ 命のかたち カナダ先住民の生みだす美』に携わり、同展の図録（国立民族学博物館編 2009 昭和堂）および『極北と森林の記憶 イヌイットと北西海岸インディアンの版画』（齋藤玲子・大村敬一・岸上伸啓編 2010 昭和堂）でも研究成果を発表した。

本報告書は、これらの一般書に所収できなかった詳細な歴史的背景や、教育およびアイデンティティの問題、および先住民の知的財産に関する概念と現状についての報告と論考を中心としている。また、版画の素材や技法に関する報告も収めた。

2 研究の経過

まず、筆者らは2007年秋から2009年度の初めにかけて、みんぱくのデータ・ベースを

参考に、対象となる北西海岸先住民およびイヌイットの版画資料（関連する絵画資料含む）約1,100点すべてを実見し、描かれている内容の確認などともに、タイトル、作者名、制作年、刷り数、技法、紙素材等のチェックをおこなった。版画の分析をおこなう過程で、カナダで発行されたカタログ類をはじめとする文献や、インターネット等をとおして版画を制作したコミュニティや民族の現況、個々の作品やアーティストなどの情報を収集した。それをもとに収集資料の地域的分布と、モチーフや技法の変遷などについて、整理・分析を重ねた。

並行して、各地域の版画をはじめとする芸術活動についての研究発表をおこない、初年度から翌年にかけては、その歴史や現状に関する基本的な情報を共有することに努めた。

2年目には、当時、筆者が勤務していた北海道立北方民族博物館の第23回特別展『トーテムの物語 北西海岸インディアンのくらしと美』に合わせて公開研究会を催した。そこでは、美術史と文化人類学とを結びつける発表や討論がなされた。同展の図録にも関連する論考を収録した。

先住民の芸術の継承に関する課題にも複数のメンバーが取り組んだ。たとえば、伝統的な知識や技術が学校教育に取り入れられるようになった経緯や、その成果についての研究などが進められた。

3年目には、芸術に関する知的所有権についての議論を深める方向で、法学者らの専門家も特別講師として招いた。さらに、そもそも先住民自身が芸術の所有権についてどのようにとらえているか、という根本に迫る議論もおこなった。

3 カナダ先住民版画の背景

北西海岸先住民とイヌイットの歴史と芸術に関する概論はそれぞれ別途収録しているが、ここでも本研究の背景として簡潔に整理しておく。

二者は、カナダ先住民のなかでも対照的な環境に住み、歴史的な背景も大きく異なる一方、芸術に関しては共通する点も少なくない。民族誌に記録される以前から、両者はともに自らが使う生活用具や儀礼具に動物の図像や独特な文様を施す伝統があった。また、神話や説話といった口頭伝承や各種の儀礼などによって、人間と動物らとの関係を良好に保ち、祖先からの土地との結び付きや自然のなかで生きる知恵を伝えてきた。こうした文化は、北西海岸では19世紀から20世紀前半にかけて、イヌイットでも20世紀半ば頃に急激な衰退を余儀なくされた。しかし、生活が大きく変わっても、人びとの間には伝統的な芸術や世界観などが伝えられてきたのである。北西海岸先住民とイヌイットたちは、20世紀の後半以降、彫刻をはじめとする技術と独自の世界観などの表現を基盤として、それぞれの芸術を発展させてきた。これらの芸術は、先住民運動においても重

要な役割を果たし、以降の彼らの経済に寄与するとともに、民族的アイデンティティの象徴として機能し続けている。

北西海岸先住民は、アラスカ州南部からカナダのブリティッシュ・コロンビア州、合衆国のワシントン州・オレゴン州にかけての太平洋岸に居住してきた複数の民族の総称である。かつては、北西海岸インディアン（Northwest Coast Indians）と呼ばれることも多かった。トーテム・ポールをはじめとする独特なデザインの彫刻がよく知られている。18世紀後半、ラッコやオットセイの毛皮などを求めてイギリスやスペイン、ロシアといった国々がこの地に進出し、先住民たちは急速に近代世界システムに取り込まれていった。1867年にイギリス自治領が確定すると移住者が増大し、漁業・水産加工業や林業・製材業などの開発の舞台となった。さらに、19世紀後半から20世紀前半にかけて、法律で伝統的な慣習を禁止されるなど圧政的な介入を受けたこともあり、人口の減少とともに文化的にも大きな衰退を余儀なくされた。

他方、イヌイットは、ヨーロッパ人らが入植した場所から遠く寒冷な地域に居住していたため、その影響を受けるのは遅かった。しかし、1910～20年代にホッキョクギツネの毛皮取引に取り込まれ、第二次世界大戦後にカナダ政府による定住化政策が進められたことで、20世紀の半ばには生活が大きく変化した。そのようななか、1940年代末に極北圏を訪れたカナダ人画家のジェームズ・ヒューストンは、イヌイットの滑石（soap stone）彫刻をアートとして商品化することに尽力し、成功を収めた。彫刻の制作は、毛皮取引に代わる経済活動として、イヌイット自身にも受け入れられただけではなく、カナダ政府もこれを支援した。ヒューストンは1950年代末には版画の開発に着手し、版画技術をイヌイットたちに指導しながら、新しいアートとして商品を生み出していった。

北西海岸地域では、1950年代頃から先住民たちの権利回復の動きが高まり、文化復興についてもその方法が模索されていた。おりしもシルクスクリーンが看板やポスターなど商業用の印刷技法として大きく発展してきた時代で、北西海岸先住民の彫刻家らは、彼らの伝統的なモチーフを版画にすることを思い付き、1960年代に試作が始まった。60年代末にはビンセント・リッカードという優れた刷り師で、先住民のよき理解者に出会い、シルクスクリーン版画は次第に美術品としての評価を受けるまでになった。

北西海岸先住民とイヌイットたちは20世紀の後半に、版画という新しい美術を生み出してきたわけだが、これらは彼らの経済に寄与するとともに、民族のアイデンティティの象徴としても機能している。カナダを訪問したことがあれば誰もが目にするとおり、空港をはじめ街のいたるところで、パブリック・アートとして先住民の美術作品が展示されている。今や、先住民の美術は、カナダを代表する文化として認識されるようになっていくといっても過言ではないだろう。

2010年の冬季バンクーバー・オリンピックの開会式では先住民の神話を題材にしたパフォーマンスがおこなわれ、メダルにもトーテムのデザインがあしらわれた。これらを

きっかけに先住民の芸術に興味を持った人もいるかもしれない。実際、筆者もカナダ先住民の図像や文様に関する質問やコメントを受けることが多くなった。

先住民の文化全般や歴史に最初から関心を持つ人は稀であろうと思う。テレビや展示会などで見て、印象に残った視覚的な情報から、その作り手や背景の文化へと関心を広げていけば、先住民に対する理解も深まるのではないか。そうした期待が、この版画研究に取り組んだ理由の一つでもある。

4 版画コレクションの概要

みんぱくの収蔵品は、カナダ先住民による版画の開花期ともいえる1970～80年代の作品を中心としたコレクションである。その多くは小谷凱宣氏（名古屋大学名誉教授）がみんぱく在職時に、カナダの博物館・美術館学芸員の推薦による作品をそれぞれ2つの時期に分けて一括購入したものである。これらに加え、北西海岸先住民では2000年に岸上伸啓が収集したクワクワカワクウのものと、イヌイット作品ではアムウェイ財団から巡回展後に寄贈されたものがある。

北西海岸先住民の版画は、作品数が多い民族集団から順に、ヌー・チャー・ヌルス（ヌートカ）190、クワクワカワクウ（クワキウトル）163、ツィムシアン（ニスガー、ギトウクサン含む）154、ハイダ76、コースト・セイリッシュ69、ヘイルツク（ベラベラ）6となっており、このほかキャリア8（ツィムシアンの血をひく作家、ここではツィムシアンの項に入れてある）、タールタン4（トリンギットの血をひく作家）、そして北西海岸ではないが、おそらく関連資料として収集されたオジブワ2（ロイ・トーマス／Roy Thomas）がある。また、原画を含む25の肉筆画がある。

イヌイットのものは、作品数が多いコミュニティから順に、ケーブ・ドーセット112、プングニトゥク108、ベーカー・レイク55、ホルマン48、パングネグトン28、クライド・リバー9。加えて、カナダ国内のその他の地域の作品9、グリーンランドのヌークのものが1点となっている。また、絵画はベーカー・レイクのもの16とクライド・リバーが11、各国のイヌイット（エスキモー）による合作が1点ある。

5 これまでに公開した成果

先述したとおり、共同研究の2年目にあたる2008年夏には、北海道立北方民族博物館と網走市立美術館の特別展で、北西海岸先住民の版画をみんぱくから借用して展示し、図録も作成した。また、翌2009年にはみんぱくの特別展および図録で、研究成果の一部を公開した。また、同年9月にみんぱくで開催された日本カナダ学会においても、一般公開シンポジウム「カナダにおける先住民アートの展開：イヌイットと北西海岸先住民

のアート伝統」で、成果を発表した。

2010年3月には、みんぱくの版画コレクションの中から約160点を収録した書籍『極北と森林の記憶 イヌイットと北西海岸の版画』（昭和堂）を出版した。北西海岸先住民とイヌイットの版画についての詳しい解説を収録すると同時に、画集としても楽しめるよう、作品の選定はもちろん、レイアウトにもこだわり、共同研究員がそれぞれの専門によって執筆を分担した。カナダ先住民の文化を取り上げた日本語文献が少ないなか、版画という美術作品をとおしてではあるが、彼らの生活や世界観、そして文化変容などを紹介することができたと考えている。

しかし、展示およびその解説等を目的とした図録の発行については、作品を所蔵する館でおこなうことができるが、一般書については、著作権者から作品の掲載許可をとる必要がある。実は、この許可を得るために予想以上の時間がかかり、著作権処理の実情を知る得難い経験ともなった。この経験は、みんぱくにとって今後の資料の収集や活用において有益な示唆を与えてくれるものになるだろう。詳細は、伊藤敦規が報告している。

6 本書の構成

本報告書では、第1部でみんぱくのコレクションの概略について齋藤と岸上がまとめた。

第2部では、カナダ先住民の芸術の展開について、事実関係を中心に歴史と各時代における芸術の意味などについてまとめた。最初にカナダ先住民社会とアートの展開について岸上が概説し、広瀬はカナダにおける先住民の芸術政策について歴史資料を中心にレビューした。そして2-1でイヌイット版画の歴史と背景についてスチュアート、小林、大村の論文を、2-2で北西海岸先住民版画の歴史と背景について立川と齋藤の論文を収めた。また、イヌイット版画に使用される和紙について、和紙輸出業・紙本修復家の一宮（森木）が、シルクスクリーンの歴史と技法について版画家の田主が、それぞれ専門の立場から論じた。

第3部では、先住民の知的財産権の概念と現状について、伊藤と久保田が具体例をもとに、その問題点や課題などの論考を寄せた。なお、本研究のタイトルは「知的所有権」だが、現在は「知的財産権」という用語のほうが一般的になっている。論文では「財産権」を使用しているが、同じことを意味している。

第4部では、カナダ先住民の版画から発展して、芸術をとりまく社会の変化や、先住民芸術の可能性と限界などに関する意欲的な論考を収めた。益子はアラスカのトリニットの例をもとに紋章の機能について、立川はアーティストの徒弟的な生活や成功するための戦略などについて、渥美はサーニッチの事例から教育自治とコミュニティにとつ

てのアートの意味、小林はイヌイト美術の作者や描かれているものと受けとめる側の
変化から「イヌイトらしさ」とは何かを論じた。

このほか、研究期間中からこれまでに刊行した出版物にも関連する論考が掲載されて
いるので、各執筆者のあげる文献もぜひ参考にされたい。

7 おわりに

このように、筆者らは版画をとおしてカナダ先住民の芸術の歴史的展開や現代的課題
を明らかにしたいと考えてきた。版画の歴史と現状については、史実はもちろん、社会
的背景や、プロデュースする側の意図と先住民の主体性などにも注目した。加えて、技
法や素材などについても取り上げた。

また、研究会では、版画のような美術（視覚芸術）のみならず、音楽や舞踊などの芸
能を含めた芸術の所有権が各民族でどう認識されているのか、といった問題も提起され
た。それら芸術が先住民社会で披露・消費される場合と、市場で商品化される場合とで
は、権利についての考え方がどのように異なるのかといった課題が挙げられた。それぞ
れの民族社会で文化的遺産（heritage）として育まれるべきものと、美術品・芸能作品と
して流通するもの、民族に共有の様式と作家のオリジナリティ、集団の権利と個人の権
利は、どこで線引きできるのか。これらはまだ学問的取り組みが少なく、手応え十分な
問題だが、その一方で利害関係を伴う現代的な応用問題でもある。今後もさらに研究を
重ねてゆきたいと考えている。

先にも述べたように本研究では、博物館資料を展示や出版により公開することの重要
性も強く意識していた。2014年1月に、企画展『イヌイト版画－カナダ先住民の生み
だす美』（主催：和紙で結ぶ地域交流と国際交流事業実行委員会）が版画家・平塚運一の
出身地である島根県松江市の松江歴史館で開催されたことは、大変うれしいことであっ
た。平塚がイヌイト版画のプロデューサーであるJ. ヒューストンを指導したという縁
から企画されたものである。この展示は、小谷先生と親交があり、本研究に関心を寄せ
てくださっていた平野芳英氏（荒神谷博物館副館長）はじめ、実行委員会事務局の安部
栄四郎記念館の方々のご尽力による。今後も、みんなの貴重な版画コレクションが、
国内の他の博物館や美術館でも展示されることを期待する。

なお、共同研究会では、多方面の多くの研究者らから貴重な提言をいただいた。本報
告書には論考を収録していないが、共同研究員には、これらの版画の大部分を収集され
た小谷凱宣先生（名古屋大学名誉教授）をはじめ、谷本一之先生（北海道教育大学名誉
教授）、佐々木利和先生（元・国立民族学博物館教授、北海道大学特任教授）、そして岩
崎まさみ先生（北海学園大学教授）に加わっていただいた。本研究に関する岩崎先生の

論考「自己表象としての先住民アート」は、『北海道民族学』10: 23-37 (2014年) に収録されているので、参考にされたい。

谷本先生は、研究当時、筆者の勤務する北海道立北方民族博物館館長（兼・財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構理事長）であったが、研究途中の2009年に急逝された。先生はイヌイットの版画家（ホルマンのアグネス・ナノガック）らとの交友があり、ひろく先住民の芸術に関心をもってその振興に貢献されていた。研究をあたたく見守り、支えてくださった谷本先生のご冥福を心よりお祈りする。

さらに、本書に寄稿いただいた一宮（森木）氏のほか、共同研究員以外でご発表をいただいたのは、次の方々である（50音順・敬称略）。

青柳由香（横浜国立大学）、葛野浩昭（立教大学）、古道谷朝生（網走市立美術館）、鈴木修二（文化庁）、山田亨（筑波大学）、渡部俊英（北海道大学大学院法学研究科／当時）

また、研究期間中に出した先述の2冊の出版物（2009, 2010 昭和堂）の編集のみならず、資料リストの整理や著作権処理などで、編集工房isの石川泰子さんに大変お世話になった。

最後に、共同研究終了から刊行にいたるまで約5年を経過し、寄稿いただいた方々をはじめ、多くの関係者の皆様にご迷惑とご心配をおかけした。すべて編者の力不足である。時に励ましてくださり、そしてここまでお待ちいただいたことに、お詫びとともに心より感謝を申し上げます。

文 献

伊藤敦規

2012 「先住民の知的財産と『先住民の知的財産権問題』」山崎幸治・伊藤敦規編『世界のなかのアイヌ・アート』（先住民アート・プロジェクト報告書）pp.137-155 札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター。

岩崎まさみ

2014 「自己表象としての先住民アート」『北海道民族学』10: 23-37。

国立民族学博物館編

2009 『自然のこえ 命のかたち ― カナダ先住民の生みだす美』京都：昭和堂。

齋藤玲子・大村敬一・岸上伸啓編

2010 『極北と森林の記憶 ― イヌイットと北西海岸インディアンの版画』京都：昭和堂。

齋藤玲子

- 2009a 「共同研究：カナダにおける先住民族芸術の歴史的展開と知的所有権問題——国立民族学博物館所蔵の北西海岸インディアンとイヌイットの版画の整理と分析を通して」『民博通信』127: 20–21。
- 2009b 「版画に登場する個性的な生き物たち」『月刊みんぱく』33(9): 6–7。
- 2010a 「国立民族学博物館所蔵カナダ先住民版画コレクションについて」齋藤玲子・大村敬一・岸上伸啓編『極北と森林の記憶』pp.8–10 京都：昭和堂。
- 2010b 「版画による先住民族芸術の普及とその後 共同研究：カナダにおける先住民族芸術の歴史的展開と知的所有権問題——国立民族学博物館所蔵の北西海岸インディアンとイヌイットの版画の整理と分析を通して」『民博通信』130: 18–19。

谷本一之

- 2009 『オーロラの下に生きる人々——北の館長エッセイ』札幌：共同文化社。

北海道立北方民族博物館編

- 2008 『トーテムの物語——北西海岸インディアンのくらしと美』網走：北海道立北方民族博物館。